「アユ(3)」 仔魚数十億　川下る

海で半年間生活

秋も深まるころ。神通川の河原では風にすすきの穂がなびいている。川には産卵を終え、はかない1年の生涯を閉じようとしている黒く錆びたアユが力なく泳いでいる。暑い夏をアユと戯れ、アユ漁に没頭したアユ漁師にとっては、時の流れのはかなさを肌で感じ、また退屈な日々が始まるのかという憂うつな気分にさいなまれる時期でもある。

しかし、少しも嘆く必要はない。死があれば必ず生もある。川では毎晩、新しい生命が誕生し、無数ともいえるアユの子供達(仔魚(しぎょ)＝ふ化直後から稚魚になるまで)が富山湾に向かって下っているのである。

海に向かって降下していく仔魚を、庄川や神通川で調査し、明らかになったところでは、その数は多い日で1日に数千万尾に達する。10月上旬から12月上旬までのアユの仔魚の降下期間を通算すれば、その数は数億から数十億尾にもなるのである。

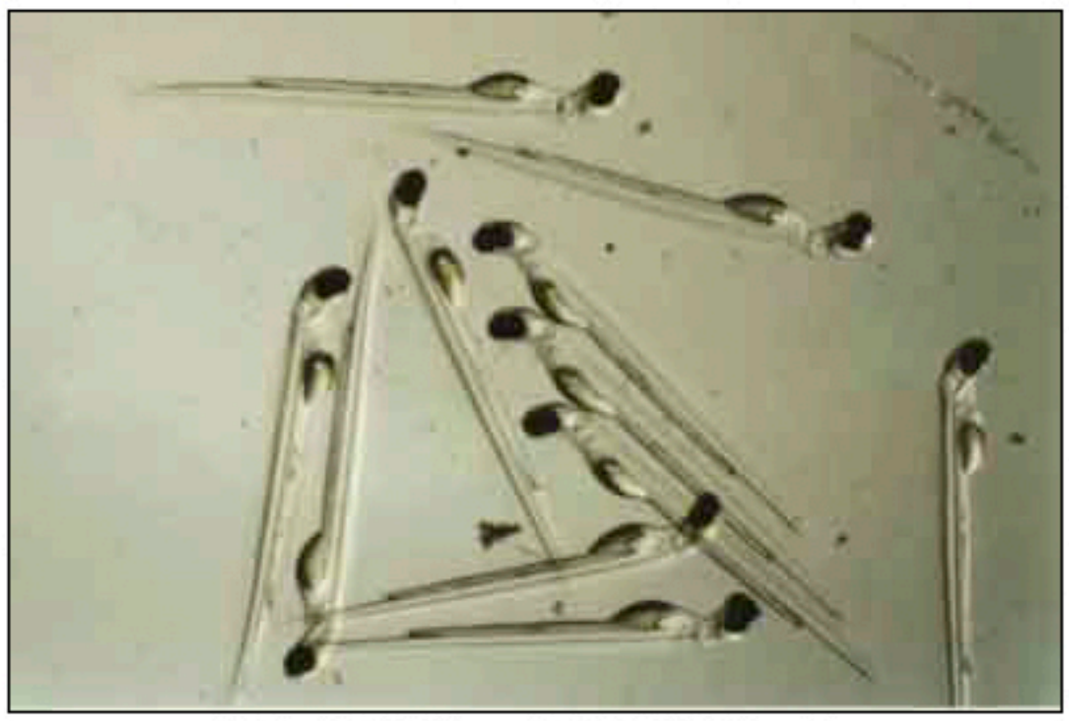
夕刻、小石の間でふ化した仔魚は、暗くなると水の表面(流のあるところ)に向かって元気に泳ぎだす。つまり、流されて海にたどり着くのではなく、自分の意志で流れに乗って海まで降るのである。

水槽での観察では、仔魚に光を当てると目だけがキラリと光る。もし、川の中でも光を当てることができれば、そこにはアユ仔魚による、見るも華麗な、大名行列のような光景が繰り広げられているはずである。

ところで、川を降下する仔魚の調査は苦行に近かった。ただでさえ、夜間である。加えて24時間寝ずの調査が必要であった。車のタイヤのパンク、川のぬかるみにタイヤがはまるトラブルも発生する。吹雪の中、雪だるまのようになりながら、川の中で腰まで冷たい水につかり、下っていく仔魚を採集する網を持っていたこともある。

夕方から夜半に河川の中下流域でふ化したアユの仔魚は、翌朝までには大部分が富山湾にたどり着く。そこで約半年間の新たな生活が始まるのである。 (田子泰彦)

庄川を下っていくアユの仔魚の採集調査。
雪の降りしきる中、冷たい川の水に腰までつかりながら網を使う＝平成7年1月、高岡市石瀬



ふ化したばかりのアユの仔魚(体長約6ミリ)